

三一新書 334

松川事件の真犯人

ジョージ・クレーと九人の男

吉原公一郎著



三一新書

松川事件の真犯人

定価 200 円

1962 年 2 月 10 日 第1版発行

著 者 © 吉 原 公 一 郎
1962 年

発 行 者 田 畑 弘

印 刷 所 暁印刷株式会社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電話東京 (201) 9 5 8 1~5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 334

松川事件の真犯人

ジョージ・クレーと九人の男

吉原 公一郎 著

三 一 書 房

松川事件の真犯人／目次

第一章 予行演習

取材につきまとう黒い影……………	九
予讃線事件——こうして起った……………	二三
汽笛は鳴り続けた——庭坂事件……………	二九
五〇分の臨検——ここでもダイヤが……………	三六
観音さまの祭りと列車妨害……………	三三
なぜ“迷宮入り”になったか……………	三七

第二章 疑惑

六人は消え、そして現われた……………	四〇
枕木に残る靴跡と留置場の奇怪な死……………	四〇
石垣は何かを知っている……………	三七
残された証拠品は語る……………	六二

第三章 現場

真犯人“割り出し”への布石……………	四四
作意の構成——「赤間調書」……………	七一
デッチ上げの起点……………	七七

“沙漠から古墳を掘り出す”……………	二二
列車ダイヤは突如変更された……………	二七
“立役者”安斎警部補に会う……………	三三
“列車強盗”——西部劇的発想……………	三九
尻つぼみ——思想的背景説……………	三五
それでも警視は“栄転”した……………	四〇

鍵にぎる元CIC通訳……………	四六
消えた警戒番所の線……………	五三
通訳の線も切れた……………	五〇

事件の発端と捜査の意図……………	五七
想像による暗示……………	五九

第四章 不在証明

事故前から現場にいた？	一八一
部下は「警察官」ではない	一八六
なにゆえの非常警戒態勢か	一九〇
C I C が知っている？	一九四
《真実》は煙となって消えた	二〇〇

乗客はまだ現場にいた	一八四
だがその人の名はいえない	一八六
「松川デス タノミマス」	一九三
彼はC I C につながっていた	一九八

第五章 背景

「事実上の講和」——単独支配政策	二〇五
産業防衛闘争と弾圧	二二
G H Q の機構はどうなっていたか	二七

ドッジ・プランと労働者	二〇八
下山総裁は犬死ではなかった	二一四
G S と G 2 の対立	二一九

第六章 目撃者

MURDER WILL OUT (殺人はばれる)	二二五
そして金作氏は殺された？	二三
飯ザカ温泉はどの方角かな？	二四
一〇年間の〈二人だけの秘密〉	二九
安斎警部補との奇妙な対談	一五

糸引いて谷間の夜汽車夢に浮き	二二六
その夜九人の大男に会った	二三
男たちは急ぎ足で通りすぎた	二四
酒が開いた〈秘密のカギ〉	二五
「三人はいいがあとの六人はまずい」	二五

第七章 樽

現場で口笛を聞いた……………一六一

五色温泉で顛覆の予言を聞いた……………一六五

東北の飲楽地「飯坂温泉」……………一七二

犯人はここに立ち寄った……………一七七

なぜ福島は狙われたか……………一八三

恫喝された日本人……………一八八

「松楽座」レビュー興業への疑惑……………一七〇

指定旅館「若喜」と「青葉」……………一七三

これはオペレーション（作戦）だ……………一七八

占領軍と労働運動……………一八五

「アカのバック・アップね、ノー」……………一九一

第八章 真実

一五九列車の運休を指令したのは誰か……見られる側の作意……………一九五

大西機関士はなにを見たか……………一九八
草色のペンキと刻印『Y』……………二〇五

第九章 黒幕

ガーケットという男……………二〇九

ジョージ・クレーは何かを知っていた……………二一六

ハンマーが使われた……………二二三

彼らはキャンプ・ドレークに向った……………二二八

「秘密外務省」CIA……………二二三

「シナへ行く、シナへ」……………二二九

付近にビケがはられていた……………二三六

第一章 予行演習

取材につきまとう黒い影

先程から一人の男が、妙に私の心をとらえていた。五十年配であろうか。やや薄くなりかけた頭髪——くたびれたグレーの背広。だが、突き出た眼は鋭い。

《どこかで会った男だ》われわれとは通路をへだてて斜向いにその男はすわっていた。彼は窓外を指さしながら、乗りあわせた客に沿線の風景を説明している様子である。しかし、停車駅が近くなると、われわれの存在が気になるのか、しばしばこちらを盗み見する。そして、視線がかちあうと、あわてて眼をそらす。

《たしかにどこかで見た顔だ》列車が岡山市に近い湿地帯を走り、この地方の特産物・蘭草いぐさの田がえんえんと続くのをみたとき、はっと思ひあたることがあった。

東京駅二一時一五分発、宇野行き急行「瀬戸」で、四国松山に向かったのは四日前のことだった。私たちはいまと同じように海側の座席をとった。そのとき、通路をへだてた反対側に乗った客の一人がなぜか印象にのこった。その男もまたいまのように、私たちへ奇怪な視線を送

っていたのだ。それがいっそう気がかりになってきたのは翌日の午後一〇時ごろだったろうか。ちょうど、藺草刈りの最盛期を迎えた岡山平野を列車が走っていたころだった。

「いまが盛りなんですよ。豊の表に使う草で、刈り入れたら雨にあてないように乾燥して、一挙に取り入れなくちゃいけないんでね、人手が足りなくなる。大変なんですネ、あの人たちは。季節労働者なんですよ」

男の声には東北の訛りがあった。私も夏の陽射しを浴びながら刈りとられてゆく藺草刈りの光景を眺めていたものである。このときも男の探るような眼がわれわれに始終向けられていた。その同じ視線が、いまふたたび私をみつめていたのだった。

藺草刈りはわずか四日のあいだにおわっていた。が、藺草田をみたとき、先刻からの視線の主が、つい四日前の男と同一人物であることに気づいたのである。

男が何者であるかいまもわからない。乗りあわせた男がたまたま同じようにぶつかるとある偶然である。だが、私たちには偶然として簡単に割り切ることのできない理由があった。このような偶然はひんばんに私たちを訪れるだろうと予想していたことだったからである。

それでも、いまから一二年前におこった四国予讃線の列車顛覆事件の第一回目の取材のときには尾行らしい姿はなかった。だが、それから旬日後の第二次取材のさいには、最初からわれわれの背後に黒い影がつきまといていたようである。関係者たちもなぜか二度目には口を閉ざしてしまった。そこには、当局か、あるいはそれ以外の何者かの手によって取材妨害がおこな

われたと見られるふしが多い。

取材妨害については、ここではふれないでおこう。ここでは松川事件の真犯人を追う第一段階として、私たちがなぜ四国予讃線事件、奥羽線庭坂事件の二つをえらんだかについて語っておかなければならないだろう。

「砂漠から古墳を掘り出す」

一九四九年は列車妨害の年だった。松川事件の前後に国鉄当局が調査した数字をあげると次のようになる。

昭和二四年四月一七九件、五月二五九件、六月五一七件、七月一五七四件、八月四八八件、九月三〇〇件（数字は『朝日年鑑』昭和二五年度および二六年度版による）に達している。

六月から七月にかけて、事故の数字が急上昇しているのは、国鉄本部運輸局保安課が「二八日午後四時緊急電話指令で『列車妨害事故は当分の間細大もらさず報告せよ』と指令した」（二四・六・二九『読売新聞』）ために調査方法に人為的な変化があったからだった。

だが、「学童のいたずらもあるが、専門的知識を持ち、内部の事情に通じている者が計画的におこなっていると思われる所がある。またその地域もかつて急進分子が多かった地方に発生しており、何らかの政治的意図によったものであったかの印象をうける」という六月三〇日の下山国鉄総裁の談話を引用するまでもなく、列車妨害は、背後関係Ⅱ急進分子という表現をも

って次から次へと報道された。その間に、三鷹、下山、松川事件があいついで発生したのである。国鉄九万五〇〇〇人の誡首を含む政府の反共政策が、これらの事件を背景にしてすすめられたことは、ここであらためていうまでもないだろう。そして、共産主義者による破壊活動であると宣伝されたこれらの事件が連鎖反応的に発生した年の翌年、つまり一九五〇年に朝鮮動乱がおこっているのだ。松本清張氏が『日本の黒い霧』で指摘されているように、アメリカ軍側に作戦の一つとして、日本における鉄道輸送の確保にその目的があった、というのは、いまや通説にさえなっているのだ。

こういう脈絡をたどっていけば、前にあげた列車妨害事件の数字のなかには、松川事件の布石として打たれてきた、つまり、いわば意識的にひきおこされた事件がかなりの数にのぼるものとみることができるとはいえないか。そして、この疑問をつきつめていくならば、かならず松川事件の真犯人にいきあたるはずである。

だが、事件以後一二年も経過した現在、そういう仕事はほとんど不可能にちかいといっている。私達はこれらのなかから、比較的人びとの記憶に残っていると思われる事件で、その手口からいって松川事件と酷似している二つの事件をえらんだ。

その一つが松川事件の三ヵ月前の五月九日「予讃線でレールの継目をコジあげ、旅客列車を顛覆させて死傷者三名を出した」(昭和二五年度版『朝日年鑑』)いわゆる予讃線事件であり、他の一つが松川事件のおこる前年の四月に松川とは眼と鼻の奥羽線庭坂駅で発生した列車顛覆事件

であった。これらの事件は松川事件と「全く同一犯行で、これと一連のつながりのある鉄道に精通した過激分子の犯行とみられた」(二四・八・二)『読売新聞』事件であった。だが、われわれは取材にかかるまで、事件の概要すらも完全につかんでいない状態であり、いわば、砂漠から古墳を発掘する仕事にも似てまったく五里夢中のありさまだった。

予讃線事件——こうして起った

松川事件の三ヵ月前、昭和二四年五月九日、午前四時二三分に、四国予讃線、浅海・北条駅間でおこった列車顛覆事件——いわゆる予讃線事件については、当時どういう理由によるのか、くわしく報道されなかった。したがって一二年後の現在、われわれが事件の状況を判断する資料としたのは、わずかに地元の愛媛新聞があるのみだった。

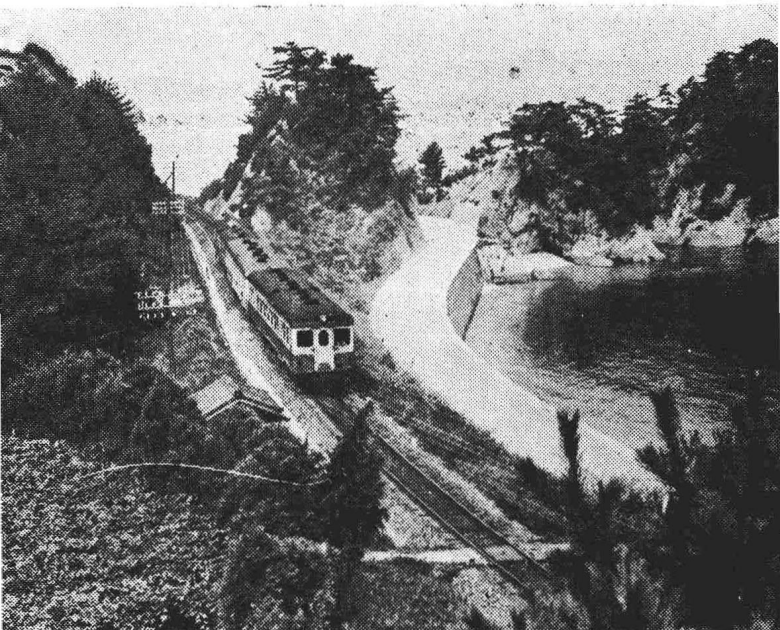
愛媛新聞社資料室に保存してあった昭和二四年五月一〇日付の紙面は、黄色く変質していた。
「集団で貨物を狙う？」

レール破壊 用具も発見

浅海—北条間 七名死傷

五段見出しである。当時は紙不足で僅か大判二頁の紙面だが、その少ない紙面は全面にわたって、この列車顛覆事件で埋めつくされている。記事の内容を簡単に説明しておこう。

四国高松棧橋駅を出た宇和島行き下り準急一列車は、浅海駅を定時に通過、時速五五キロで



南に山を背負い、その反対側には今治街道をへだてて瀬戸内海が広がっていた……。

北条駅に向かっていった。左手は山、右に瀬戸内海が夜明け近い冷気を吸って黒々と広がっていた。

列車が菰田トンネルを通過して北条町難波大浦の切り通しカーブにさしかかった瞬間、ものすごいショックとともに、機関車が脱線、四〇メートル突っ走って右手の小山に激突、勢いあまって一二〇度右旋回、高さ八メートルのガケに半身をのり出してそのまま停った。

炭水車と客車二輛がつづいて「く」の字型に脱線、そのあいだにはさまれた機関助手津吉悦夫（20歳）、一色好隆（19歳）、同見習徳田昌三（20歳）の三君は胴体切断や全身の火傷で即死、藤田三光機関士（当時23歳）だけが奇蹟的に顔面を火傷した程度ではい出してきた。

もしも、この切り通しカーブの海側に小山がなかったら、機関車は七輛の客車もろともガケ下の今治街道に転落したにちがいない。これは、後にのべる奥羽線庭坂事件で、線路際の電柱にささえられて、客車の顛倒をまぬがれたのと同じ状態である。

ともかく、現場検証の結果、レールのツギ目板二カ所、四枚がはずされ、犬クギ八本がぬかれたうえに、レールが七五ミリの幅で海側へずらされてあったのが脱線の原因と認められた。浅海駅寄りにも、ツギ目板をはずそうとして、ボルトの頭をたたいた形跡があった。

ただちに、玉村勝二国警隊長（現警視庁刑事部長）を本部長に、特別捜査本部が北条町署におかれ捜査がはじめられた。

現場付近からツギ目板三枚、ボルト八本、犬クギ七本がみつかり、午後六時ごろ、現場から五〇メートル離れた山中からモンキースパナ一丁、翌五月一〇日に、レールをずらすのに使用されたと思われる丸太棒、犯行のさい音を消すために使ったと思われるスフ製のタオルの破片米粒大の人間の皮膚（手足不明）などが発見された。だが、ツギ目板一枚と犬クギ一本はついに発見できなかった。

これらの証拠品、遺留品などから犯行は単独犯ではなく、少なくとも五、六人で、手口からみて素人ではないと判断された。

五月一〇日付の愛媛新聞では、この記事にくわえてさまざまな角度からの推理や捜査当局の分析がおこなわれているが、それはしばらく措くとして、以上が当時の新聞による予讃線事件